

# 令和7年度 はばたき学習（総合的な学習の時間）実践・研究計画

部 員 ○大森果歩、伊藤智美、大山光子、小室真紀

## 1 昨年度の成果と課題

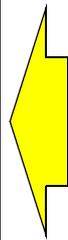
昨年度の実践を通して、はばたき学習における自律した学習者の姿が見えてきた。

- ① 6年「150周年のベストメモリー」の実践では、子どもたちが、「逃走中」というテレビ番組で行われている鬼ごっこのようなことをするというプロジェクトを立ち上げた。「校外を自由に走り回れるようにしたい」「長い時間をかけてやりたい」など、自分たちの思いを実現させるために、プロジェクトチームで考えたルールでお試し活動を実施した。「指示が伝わらない」「捕まった人が退屈になる」「ルールを守らない人がいて危ない」などの課題が出てきており、楽しさと安全性を両立させて実施する困難さを実感していた。しかし、くじけることなく話を粘り強く重ね、実施に向けて突き進んでいく姿が見られた。子どもたちを動かしていたのは、お試しで実感した、「この活動を行う楽しさを全校のみんなにも味わってほしい」という思いであった。自分たちが選択した活動に価値を見いだしたからこそ、諦めずに行動し続けるエネルギーが生まれたのだと考える。
- ② 4年「きらり みんなの笑顔あふれるまちⅡ～みんなが笑顔になるためによりよいかかわり合いを求めて～」の実践では、地域の留学生やハワイの児童との交流を経て、関わった人に見られた特質について、「自分とどのくらい違うのか」と「そのような人を受け入れることができるか」という二つの視点を軸とした座標軸に付箋を貼って表した。「髪の色が金色の人」という特質についての付箋の位置が大きく分かれていた。「金色の人は怖い印象」という意見と「髪の色が違ってても気にならない」という意見である。そこから「お兄ちゃんが金髪にしているから受け入れられないことはない」といったように、同じ「受け入れられる」という意見にも様々な背景があることを共有できた。可視化された互いの考えのずれからその理由を捉えることで、各々がもっている価値観に広がりが見られた。自分のもつ概念と他者のもつ概念とのずれに気づき、自分にとってよりよい概念へと更新する姿が見られたのは、探究していく中で見いだした概念について、他者とのずれに着目できるような活動や表現の場を設定したからだと考える。
- ③ 5年「きらり みんなの笑顔あふれるまちⅢ～働くってどんなこと？～」の実践では、家庭内で「働く」、職業に就いて「働く」、学校のために「働く」と、年間通して「働く」という概念を形成していく計画を立てていた。しかし、職業について働く上で、相手への配慮を大切にしたいと他者への影響を考えていた子どもたちであっても、「6年生に感謝を伝えるため」「在校生に成長を示すため」働くという意識が高まらずに6年生への集会に臨んでしまった。形成した概念を活用できるような手立ての必要性を感じた。

こうした成果と課題を踏まえ、はばたき学習部は、自律した学習者の姿を次のように捉える。また、自律した学習者が育つ授業デザインの具体的な取組を次のように設定する。

## 2 はばたき学習における自律した学習者の姿

- ① 自分たちの活動に価値を見だし、思いや願いを強め、主体的に探究に向かう姿
- ② 自他のもつ概念のずれに着目し、自分にとってよりよい概念へと更新する姿
- ③ 単元で形成した概念を更新して活用する姿



## 3 授業デザインの具体的な取組

- 思いや願いを強めて探究に向かえるように、現状把握に関連付いた課題設定や新たな方策を工夫する。
- 自分にとってよりよい概念へと更新できるように、自分と他者のもつ概念とのずれの背景を思考ツールを用いて整理・分析する場を設定する。
- 単元で形成した概念を活用できるように、形成する概念のつながりを意識した単元構想と単元配列にする。

